

書籍紹介

『イランは脅威か——ホルムズ海峡の大國と日本外交』

齋藤貢著、岩波書店、2022年2月22日、2000円+税

ISBN978-4-00-061511-2



イランは国際社会の中で、特殊な政治的環境を持つ大国であり、世界的にも有数の資源大国である。中東・イスラーム諸国の中でも、古代ペルシア帝国由来の歴史的文化的背景を持ち、今日も科学技術上のレベルは高い。

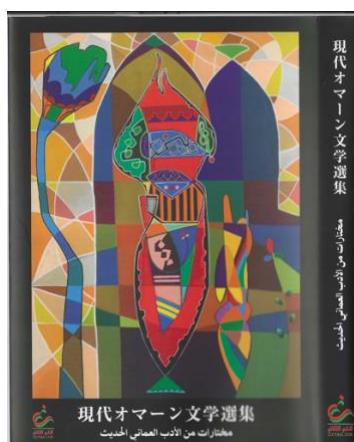
歴史学や考古学、宗教学やイスラーム哲学などの人文系の学問の世界では、イランは極めて重要な研究テーマを提供してくれる魅力あふれる国であるが、世界政治の分野では、近年、特に多くの問題を抱える国の一つになっている。特に、イランとアメリカの間には深刻な政治的対立が横たわる。国家の需要を満たす原油の90%近くをイランとその周辺の国々に依存している日本にとって、イランとの外交関係はまさに死活問題でもある。

このような難しい背景の中で、アメリカのご機嫌を伺いつつも、日本が目指す独自のイラン外交とは、どのようなものであるべきか。著者の齋藤氏は、外交官としてのキャリアの最後に駐イラン特命全権大使を務めた。その困難な現場で、あえて積極的な外交戦略を試みることによって、新しい日本外交の将来を示唆してみせる。

本書には、著者が直接かかわってきた複雑な外交戦略の内側をぎりぎりまで明らかにして、まるで映画を見ているような臨場感に襲われるシーンもある。アメリカの厳しい視線の中にありながらも、日本とイランが相互に理解しあう舞台を準備する手腕とは何だったのか？まさに目から鱗の労作である。

『現代オマーン文学選集』

オマーン文化協会運営委員会編、2022年1月31日、
オマーン文化協会運営委員会出版、ISBN978-99969-3-890-0
(無償)



本書はオマーン文化協会運営委員会によって、オマーンの著述家たちを世界に紹介するために、彼ら・彼女らの著作を各国語に翻訳して広めるという国家的プロジェクトのなかで、その一部が日本語に翻訳されて出版されたものである。この事業は 1974 年に設立されたオマーン日本友好協会による相互協力の成果でもある。

本書には論文と文学を合わせて 21 作品が含まれているが、それぞれが 5 頁から 15 頁という、ハイライトともいえる短い部分のみが翻訳され紹介されるというダイジェスト版である。将来的には、ここから関心のあるテーマを選び、それぞれの著書を手に入れることに繋がるのであろう。

それでも、このダイジェスト版によって、日本人になじみの少ないオマーンの作家たちの活躍ぶりがよく理解でき、彼ら・彼女らがどのようなテーマに関心を持って活躍しているのか、少しずつ理解することができる。それが今後の日本とオマーンの友好をさらに高めていくための、新しい一歩となることを願っている。

造形芸術家のアブドゥルカリーム・アル・マイマニーさんによる表紙絵も、ユニークで色鮮やか、見ていると元気になれるような気持がするが、何を表現しているのか、気になる表紙絵である。

『国家と実存「ユダヤ人国家の彼方へ」』

立川健二著、彩流社、2022年1月31日、3000円+税、

ISBN978-7791-2797-7



この書籍は、国家の住人である人々を「国家とアイデンティティ」という枠組みから解き外して「実存」としての個人が生きる次元を明らかにする政治哲学の労作である。前半は政治哲学を考える基盤としての精神史の体系を分かりやすく解説し、本書の半ば以降では、バビロン捕囚から始まり、現代に再び建国されたイスラエルとユダヤ教徒との関係までを丁寧に検討する。

その作業によって、イスラエルに住むユダヤ人たちの存在を「民族」という枠組みではなく、それぞれの個人として理解する道を選

び、多くの文献や資料を紐解きながら、緻密な検証を続けていく。決して理解しやすい議論ではないが、ともすれば国家という巨人に取り込まれる人間の存在意義を「ユダヤ人」というアイデンティティに特化して検討する。

ユダヤ教の歴史をたどってみると、アブラハム契約に始まり、モーセによるシナイ契約を頂点として、民族宗教の枠組みが固まる。その後、世界各地への離散によって、今日ではユダヤ教は民族の枠を超えて「ユダヤ教徒＝ユダヤ人」となり、民族的要素は失われることになった。そのためか今日では、出自がどうであれ、ユダヤ教に入信すればそのままユダヤ人となると主張するユダヤ教徒も多い。評者が親しくしているラビのジョナサン・マゴネット先生などは、「ユダヤ教はキリスト教やイスラームと同様に、普遍的な宗教である」と主張する。しかし、そういう立場を理解するとしても、紹介者は、ユダヤ教が架空の民族としての枠組みを、今日も維持していると感じことがある。

その具体的な事例は、イスラエルにおけるパレスチナ人への迫害であり、特にガザへの攻撃である。イスラエルの政策は個人としてのユダヤ教徒には責任はないかもしれないが、軍事的政治的には、イスラエルよりはるかに脆弱なパレスチナ人に対する攻撃については、どのように理解するべきなのか。パレスチナでは、毎日のように多くの人々が日常の生活を失い命を落としている。

今日のユダヤ人が民族としてのアイデンティティを失っているということには違和感は抱かないが、それでは、現在の領土を死守するだけでなく、ヘブライ語聖書（旧約聖書）の記述に従って、神が与えた土地を取り戻すためだけでなく、パレスチナ人を追い出して入植地を増やしていくという不法行為については、どのように受け止めていけばいいのか。

ユダヤ人を民族として把握するのではなく、個々人の実存を求めていき、ユダヤ教徒＝ユダヤ人としてみる立場は広がっていると紹

介者も受け止めている。そうとなれば、パレスチナに平和を、という願いはどのように実現するのか、気になるところである。

著者は終盤になって、ヤコヴ・ラブキン先生（モントリオール大学名誉教授）の発言を引用して、多くの宗派やグループに分かれて、相互に分断が進むユダヤ教徒とイスラエルの関係を危惧する発言を紹介している。特に正統派や超正統派はイスラエルが世俗国家であるとして、その存在を認めていない。

最後に著者は、やはりイスラエル国家を取り巻く歴史的判断やシオニズムについて、既存の判断を厳しく批判しながら、新しく鋭い判断を紹介しつつ、「ユダヤ人だけが特別な存在ではない」として、悲劇はユダヤ人だけでなく、世界中の人々が歴史の中で被ってきているという事実を強調しながら、パレスチナ難民に心を寄せている。

本書は既存の研究書のように、イスラエル国家やユダヤ人を批判する立場で書かれたものではないが、政治史上の様々な事例を丁寧に検討しているからこそ、読み終わって、「世界史」というものが恐ろしい力をもって人類の運命を左右しているのかもしれないと思わせられたことである。